

不登校新聞 勇気与える

創刊から12年半の
「Fonte」



創刊は1998年。前年に、全国で中学生の自殺が相次いだのがきっかけだった。不登校の子の親たちが、「悩んでいる親や本人をつなぐ市民のメディアがほしい」と全国不登校新聞社を立ち上げ、NPO法人

不登校の若者やその親が取材し、発行する新聞「Fonte」(フォンテ)が、創刊から12年半で通算300号を超えた。子どもの視点に立つことにごたわり、当事者や親たちに役立つ情報を届けてきた。ただ、不登校に対する偏見は、いまだに根深いという。
(見市紀世子)

本人や親が取材 通算300号



石井志昂編集長(右)と奥地圭子代表理事=東京都北区

に。「不登校新聞」の名前でスタートし、2004年にラテン語で「源流から」という意味の「Fonte」に改名した。
タプロイド判8ページの新聞は、月2回発行。半年間4800円で希望者は誰でも購読できる。インターネットの普及などで部数はピーク時の約6千部から3分の1に落ち込んだが、過去の記事を公開するネット版(<http://www.funoko.org/>)は、年間4万人が見ているという。

東京のほか名古屋と大阪にも拠点がある。親だけでなく当事者や経験者が「子」も若者編集部をつくり、取材や執筆、編集にかかわる。編集部で企画を練って取材を申し込むと「子どもたちの力になるのなら」と受けてくれることが多いという。

10月15日付の300号は、漫画家の西原理恵子さんが1面を飾った。不登校経験のある若者が自らの悩みを打ち明けながら、親との関係や働くことについて聞いた。最近では作家のリリー・フランキーさん、漫画家のちばてつやさんも登場している。

当事者の体験記や、親の会、講演会のお知らせ、本の紹介などが毎号ぎっしり詰まっている。編集方針は、当事者の視点を大切にする。と。「夏休みに祖父母宅へ行く」と、親族から不登校を責められるのでつらいが、どうしたらいいか、「どうして学校やアルバイトへ行けない時に、相手に不快感を与えないためには」など、子どもたちの悩みを考える企画もある。

石井志昂さん(88)は中学2年から不登校になり、フリースクールに通いながら不登校新聞に参加、06年に2代目の編集長になった。

忘れられないのは、100号記念

で訪ねた美術家の横尾忠則さん。10代の不登校の当事者9人を前に、「一番大切なのは直感を信じる」と。不登校というハンディを選んだ君たちは、学校をやめた時点で自立が始まっている」と励ましてくれた。

文部科学省は、病気などを除く理由で学校を年に30日以上休んだ子どもを「不登校」と定義している。09年度の調査では、全国で小中学生約12万人が不登校とされ、小学校では316人に1人、中学校が36人に1人。フリースクールなどの受け皿は増えたものの、「親の育て方が悪いから怠けて不登校になった」といった偏見がいまだに根深い。

全国不登校新聞社代表理事の奥地圭子さん(69)は「子どもたちは取材先から勇気をもらい、自分で考える力をつけている」と話し、「居場所や相談窓口は増えたけれど、子どもたちは楽になっていっているのでしょうか」と問いかける。子どもが不登校になったとき、親が「育て方のどこが悪かったのか」「この子の人生はもうだめになる」と悩むのも、20年以上前から変わらないという。

購読の申し込みは不登校新聞社
(03・5963・5526)へ。